

卒業の日に 贈る言葉

激動の社会に旅立つ卒業生の 皆さんへ

中央大学学長 河合 久 KAWAI Hisashi



この春、中央大学学士の学位記を手にする卒業生の皆さんに対し、本学在籍中の研究、文化、スポーツ、ボランティア等の様々な分野での活躍を讃えますとともに、ご卒業を心からお祝い申し上げます。また、ご子女に対し、惜しみない支援と応援を送ってられるご家族・ご関係の方々に敬意を表しますとともに、我が事のように本日をお慶びのことと拝察いたします。ご卒業、誠におめでとうございます。

卒業生の皆さんは、コロナ禍を経た社会全体の大きな転換期に入学し、国際情勢不安や円安そして物価高による影響が日常生活に顕在化する中で学生生活を送ってこられました。そのような不確実性の高い時代を、皆さん自身が的確に状況判断して柔軟に対応されてきたことが学位記に結実したのだと、学長として歓喜に堪えません。皆さんは、教授陣や友人との関わりの中で、激動する社会においていかなる環境でも通用する発想の転換力や創出力を身につけたのではないかと思います。

私たちは、得意分野や当面の仕事にこだわらず、異分野との融合、そして、まったく新しい人間関係や組織間の有機的相互関係をもって、新たな世界を共創していく時代に直面しています。日本の人口減少と少子高齢化、世界の産業構造や

国際関係の急速な変容が、今日の激動する社会の背景にあることに鑑み、いかにして国力を維持・強化できるかは将来を担う皆さんの双肩にかかっています。皆さんは決して受け身であってはなりません。大学で得た知識や問題解決へのアプローチは、どのような分野のものであっても、私たちの現実世界に当てはめて解釈し、応用することが可能です。

中央大学で学び、今日ここに手にした学位を胸に、学生生活から得た成果を確認し、それを新たな世界に価値あるものとして実装できるよう心掛けていただくことは、自分の存在価値を能動的に示す最も合理的な態度だと考えます。そのことによって、本学のユニバーシティメッセージである「行動する知性。」を今後も体現し続けていただきたいと願っています。

結びに当たり、皆さんには、中央大学の卒業生であるという誇りをもって、これからの人生を堂々と歩まれることを祈っております。くれぐれも健康に気を付けて、元気にご活躍されることをお祈り申し上げます。

はなむけの言葉

法学部長 遠藤 研一郎 ENDO Kenichiro



学位を無事に修められ、中央大学を晴れてご卒業される皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

さて、皆さんは、ここに到達するまでに、どれくらいの努力があったのでしょうか。勿論、努力をしたからといって常に報われるわけではありません。むしろ、報われるまで努力を継続したからこそ、今があるのだと思います。何冊もの専門書を読み、実験を行い、留学をし、レポートや論文を書きあげ、仲間と議論をし、幾度となくプレゼンテーションをしてきたはずです。その日々の知的好奇心と知的誠実さに対して、そして諦めずに継続した日々に対して、最大限の賛辞を送ります。

特に、法学部を卒業される皆さんへ。皆さんがこの学びの場で手に入れたものは、結局、何でしょうか。その根幹をなすものが、「汎用性のある法的思考」であったことを願っています。法学・政治学は、決して、「今ある規範」のみを「暗記」をするだけの学問ではなかったはずで、絶対的な解がない中でも、正義・公平を軸として、まだ解決できていない問題、さらには、これから生じるかもしれない未知の問題と向き合い、私たちの社会が少しでも良くなるための規範を追い求める学問であった

はずです。

特にこれからは、ますます不安定な社会が待っているような気がします。絶対的な価値は加速度的に薄まっています。私たちの生活そのものが根本から崩れ去る脅威も、私たちから遠い距離にあるものではありません。機械と人間の区別が、もっと曖昧になる世の中になります。そのような中でも「法的思考」は、皆さんが卒業後どのような場所に身を置いても、そして何年経っても役立つ財産であるはずで、

さて、皆さんは、卒業後、これまで積み重ねてきた学びをどのように活かす予定でしょうか。卒業後そこが大切のように思います。本学の法学部を卒業することに誇りを持ち、これまで学んできたことを礎に、さらに学び続けてほしいと願います。そして、できることなら、その学びを、行動に移し、社会に還元してほしいと思います。

「自分が自分であるために、学び続ける」。私が、いつも心に留めている言葉です。末筆ながら、今後の皆さんの益々のご活躍を祈念し、はなむけの言葉とさせていただきます。

「支えられる側」から「支える側」へ

経済学部長 後藤 孝夫 GOTO Takao



ご卒業誠におめでとうございます。皆さんがこの多摩キャンパスで過ごした四年間は、教室での講義にとどまらず、友人との語りや、時には孤独な思索の時間を含め、かけがえのない資産となったことでしょう。また、皆さんが本学部で学んだ四年間は、世界情勢が激しく動き、経済の不確実性が高まった時期でもありました。その中で、経済理論を学び、データの向こう側にある社会の動きを読み解く力を養った皆さんの努力に、学部を代表して深く敬意を表します。

皆さんは経済学を通じて、これまで世の中の仕組みを学んできました。「見えざる手」や、需要と供給、インセンティブの構造など、社会がどのように回り、富がどのように分配されるかを体系的に探求してきました。しかし、教科書にはあまり書かれていない、もう一つの重要な視点があると思います。それは、皆さんがここに至るまで、数えきれないほどの「他者の労働」と「善意」によって支えられてきたという事実です。

大学生活を支えてくれたご家族の存在は言うまでもありません。しかしそれだけではなく、皆さんが安全に、そして安心して大学生の四年間を過ごせたことは、誰かの献身的な仕事によって支えられてきたからにはほかなりません。学生というある種特権的

な時間は、社会全体が皆さんを守ってきた期間だったとも言えます。社会は、皆さんの可能性を信じ、リソースを配分して皆さんを支えてきたのです。

明日から、その立場は逆転します。

「社会に出る」とは、単に給料を得て自立することだけではありません。誰かの生活の一部を担い、誰かの安心を作り出し、誰かの人生を支える側に回ることなのです。経済学の語源である「経世済民」は、「世を治め、民を救う」という意味を持っています。大げさに聞こえるかもしれませんが、皆さんがこれから行う仕事のひとつひとつが、巡り巡って誰かを支え、社会を支えることになるのです。

もちろん、これから歩む道は平坦ではないでしょう。不条理や理不尽に直面する日もあるはずで、そんな時こそ、経済学部で培った「冷静な頭脳と、温かい心(Cool Head, but Warm Heart)」を思い出し、勇気をもって困難に立ち向かっていってください。

「支える力」を持つ人こそが、真に豊かな大人であると私は信じています。皆さんが、経済という冷徹な数字の世界の向こう側に、温かい人間の営みを見出し、強く優しい「支える人」として社会で活躍されることを心より祈念しています。

未来へ踏み出す皆さんへ

商学部長 奥山 英司 OKUYAMA Eiji



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。中央大学での学びを修め、晴れてこの日を迎えられることを、心よりお祝い申し上げます。また、皆さんを支え見守り続けてこられたご家族や関係者の皆様にも、心よりお祝いを申し上げます。

皆さんが中央大学、とりわけ商学部で過ごした時間は、それぞれに異なるものだったことでしょう。商学部では理論の習得に加え、企業や社会の現実を目に向け、課題を主体的に考える姿勢を大切にしてきました。思い通りに進んだこともあれば、試行錯誤を重ねたこと、立ち止まって考え込んだ時間もあったかもしれません。しかし、そうした一つひとつが、社会や組織と向き合いながら判断し行動する力を育ててきた、かけがえのない経験です。大学での学びは、必ずしもすぐに成果として現れるものばかりではありません。講義で得た知識や議論を通じて培った考え方、人との出会いの中で生まれた問いは、社会に出てからふとした瞬間に結びつき、皆さんの判断や行動を支えてくれるでしょう。大学で過ごした時間の価値は、後になって静かに実感されるはずです。

これから皆さんが歩んでいく社会は変化が速く、先行きが見えにくい時代です。だからこそ答えを急ぐのではなく、自分の

頭で考え、他者と対話しながら道を探っていく姿勢が、これまで以上に重要になります。実学を掲げる商学部で培った、現実を多面的に捉え根柢をもって考える力は、こうした時代において大きな強みとなるでしょう。もちろん、これからの道のりが常に順調であるとは限りません。そのようなときには、中央大学で学んだ日々を思い出してください。ここで身につけた学びの姿勢や人とのつながりは、皆さんのこれからを支える確かな土台となります。

大学での学びは、卒業とともに区切りがつくものではありません。中央大学商学部で培った、社会と理論を往復しながら考え続ける姿勢や知的好奇心は、これからの人生の中で、確実に皆さんを支え続けるでしょう。皆さんがそれぞれの場で重ねていく経験や挑戦は、かけがえのない財産となり、後輩たちにとっても大きな励みとなるはずです。

どうか中央大学の卒業生であることに誇りを持ち、自分らしい歩みが続けてください。皆さんの前途が実り多いものとなることを、心より願っています。

大学での学びを礎に、社会でのさらなる学びへ

理工学部長 庄司 裕子 SHOJI Hiroko



理工学部を卒業される皆様に、心よりお祝い申し上げます。また、これまで学生生活を温かく見守り、支えてこられたご家族の皆様にも、深く感謝と祝意を表します。皆様は理工学部において、それぞれの専門分野について理論と実践の両面から多くのことを学んでこられました。その学びを振り返るにあたり、「学び（ラーン）」と、それと対をなす「アンラーン」という考え方について触れておきたいと思います。

哲学者の鶴見俊輔さんは、学生時代に盲聾聾の偉人ヘレン・ケラーさんと話す機会があり、彼女の「アンラーン」という言葉に対して「学びほぐす」という訳語を与えました。ヘレン・ケラーさんは「私は大学でたくさんのことを学んだが、そのあとたくさん、学びほぐさなければならなかった」と話したそうです。確かに、大学で身につける知識は、学問を学ぶ上で大切な土台ですが、理解しただけでは十分ではありません。一度ほぐし、自身の経験や思考に照らして編み直すことで、知識は初めて生きた力になります。「学びほぐす」という表現には、そのことが的確に示されているように思います。

皆様が学んでこられた理工学部の分野では、基礎となる理論を理解し、それを実際の課題に応用していくことが重視されます。

現実の問題は教科書どおりには進まず、試行錯誤や工夫が欠かせません。社会に役立つ技術や知を生み出す理工学においては、ラーンとアンラーン、すなわち学ぶことと学びほぐすことが、常に一体となって求められています。もっとも、大学で扱う課題は学びのために整理されたものです。現実社会では、何が課題であるのかを見極めるところから始まります。これから皆さんは、新たな知識を学び続けると同時に、それを学びほぐしながら、自ら考え、行動する実践の場へと進んでいくことになります。

卒業証書には「所定の課程を修了し学士の学位を授与する」と書かれていますが、それは学びの終わりを示すものではなく、これから自分で学び続ける力を身につけた証なのです。理工学部で培った知と姿勢を力に、社会の中で新たな一歩を踏み出されることを願い、皆さまの今後の活躍と学びの実りを心より祈念し、お祝いの言葉といたします。

皆さんの活躍を願っています

文学部長 緑川 晶 MIDORIKAWA Akira



ご卒業おめでとうございます。
大学には多くのステークホルダーがいます。利害関係者とも訳されることがありますが、「大学は誰のものか」と問われたときの回答がもっともしっくりくるかもしれません。当然、大学は学生のものであり、教職員や学生の保護者、そして地域のものであると言えるでしょう。税金などの公的な支援も受けているので、広く社会のものとも言えます。しかし、もっとも多くを占めるステークホルダーは実は卒業生です。
卒業生は単に人数が多いだけではありません。大学を運営するための組織にはいくつかありますが、最も上位にあるのが理事会や評議員会という組織です。そして、この組織を支えている主要な人々が中央大学の「卒業生」になります。ぜひともホームページなどで確認してみてください。中央大学では学員とも表現されていますが、様々な領域で活躍されている卒業生が、このように裏方となって大学を支えています。
もちろん、中央大学の卒業生だからといって、大学を支えることが義務となることはありません。卒業したら、皆さんの生活があり人生がありますから、大学とは一線を画すことも当然だと思います。でも、もし「中央大学の卒業です」と誇れる気

持ちが少しでもあるようでしたら、そして、その誇れる気持ちをより豊かなものになりたいと感じたら、皆さんの後輩たちやこれから後輩となる人たちがより良い生活を送れるように、ぜひ大学を応援し、支えて欲しいと思います。テレビの前での応援でも良いですし、後輩が会社訪問したときに一声掛けるだけでも良いです。どのような形でも良いので、大学を末永く見守って欲しいと思います。また、皆さんのこれからの活躍が、翻って大学の力にもなります。私たち教職員としてもより良い大学となるように努めるとともに、これからの皆さんのご活躍を祈念しております。

理想を胸に希望を抱いて志を高く

総合政策学部長 堤 和通 TSUTSUMI Kazumichi



神話学者のジョセフ・キャンベルによれば、神話の主人公はだれも見出したいと思う場所を探す旅に出る、といえます。それは、アスリートが競技に臨むときに自身の中に見出すことができ、そこから自身の行為が生まれてくる、静かな場所であり、また、ダンサーが踊りを舞うときに自身を知って保持すべき自分の中心である、といえます。ここで求められているのは物理的な場所ではなくて、欲求や恐怖や^{しがらみ}柵から自由に、自分の行動について決断を下すことができる、それぞれの心の中に見出される静止点です。往年の名作になりますが、ジョージ・ルーカスが『スター・ウォーズ』を撮ったときに、ジェダイが学ぶフォースという着想がキャンベルの神話学にヒントを得ているといえ、イメージし易いかもしれません。
不確実性の時代といわれて久しく、社会情勢はその度合いを益々強くしているようです。そのような社会情勢にあって、総合政策学部を卒業する皆さんが在学中にこのような場所を探り当てたことを期待しています。このような場所を探り当てるか、その存在に気付くことができれば、様々な局面で確かな歩みを進めることができるでしょう。
このような場所を探り当てるには宗教や芸術が助けになると

いわれます。その点で、画家の石田徹也が語った言葉が印象的です。それは、「聖者のような芸術家に強くひかれる。『一筆一筆置くたびに、世界が救われていく』と本気で信じたり、『羊の顔の中に全人類の痛みを聞く』ことのできる人達のことだ。自分は俗物だと思い知らされます。」という言葉です。
石田徹也は自身がこの境地にあるとは述べていませんが、自身が理想として抱く芸術家の姿をこのように述べたのです。石田徹也の作品は、時代の輪郭を描くのが難しい社会状況で時代を描くことをやめず、社会に生きる人々の思いを代弁するものであったと評されています。こうした評価は、引用した言葉が石田の志を表すものであったことを証するものであるように思います。世情では理想や希望を語るのに躊躇を覚えるところがありますが、皆さんには、理想を胸に希望を抱いて志高くあってもらいたいと思います。
ご卒業おめでとうございます。

世界を動かすのは誰?——あなたです!

国際経営学部長 木村 有里 KIMURA Yuri



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。中央大学を旅立つこの日に、心からの祝福を贈ります。

私たち国際経営学部の合言葉は「世界を動かす人になろう!」でした。そのなかで私はこれまで、「Global という名の場所は存在しない」と何度もお伝えしてきました。「世界」というと、遠くに広がる巨大な舞台のようなものを想像しがちです。でも、違います。世界とは、あなたがいま立っているその足元から広がる、無数のローカルの連続体です。文化や価値観は境目なく溶け合い、にじみ、揺れながら、絶えずグラデーションを描いています。だからこそ、空想の「世界」ではなく、自分の足元から始まる「現実の世界」に触れ、考え、動いてほしい。まずは目の前の誰かのために、まずは身近な場所から。そこから広がる行動が、世界を動かしていきます。

いま、世界は格差や分断、軋轢に満ちています。偏狭な意識や排他主義は、白門にも、そしてGLOMACにも似合いませんよね。このキャンパスから育つ皆さんは、ちがいを認め合う寛容と公正を身に着けているはずですから。

キャンパスに立つテミス像、秋には天秤に柿がのっけていなかなかシュールでしたが、私はあの像を見るたびにこう思います。天秤は、多文化の価値観を公平に衡量する力。剣は、組織や社会を動かす

決断力。そして、目隠しをしない中大のテミスの目は、きつと世界を見わたしているのだと。

「世界を動かす」とは、なにも国際企業で活躍することだけを意味しません。地域の誰かにそっと手を差し伸べる瞬間も、部屋で赤ちゃんを抱きしめる時間も、等しく世界を動かす営みです。あなたの日々の選択、態度、言葉、他者への眼差し。そのすべてが、確かに社会を変えていきます。だから、世界を動かす人になろう。

2019年に誕生した国際経営学部は、皆さんが4期生です。歴史が浅いぶん、これから一緒に創りあげていく余白がたくさんある学部です。卒業していく皆さんが「誇れる大学」「誇れる学部だ」と思ってくれるように、私も、そして学部のみみんな頑張りますね。時々、どこでどうしているのか、近況を聞かせてください。そして、世界で積んだ経験をぜひ後輩たちに話しに来てください。励ましが必要なときは、いつでも帰ってきてください。一緒にお茶を飲みましょう。

国際経営学部に来てくれて、本当にありがとう。これからもずっと仲間です。

最後にもう一度、声をそろえて言いたい—— We are GLOMAC!

変化の中で、自分らしく歩む

国際情報学部長 石井 夏生利 ISHII Kaori



中央大学をご卒業の皆さん、ご卒業おめでとうございます。人生の大きな節目の日を迎えられたことを教職員一同、心より祝福いたします。

国際情報学部 (iTL) の卒業生は4期生となります。iTLは先端分野を学際的に学ぶ学部で、卒業するためには幅広い学習に取り組む必要があります。技術の変化は早く、ここ数年の間を振り返っても、メタバースが流行ったかと思えば生成 AI が登場し、私たちの生活を一変させてきました。常に変化する社会の中で、消費者として生活を送りながら、学生として新たな技術の仕組みを学び、関係する法的論点を考え、語学やグローバルな教養を身につけることは大変だったのではないのでしょうか。しかし、そのような学びを経て無事に卒業を迎えられたこと、そしてその過程で重ねた多くの経験や複数の学問分野に触れたことが、皆さんの人生の糧となり、多角的な視点を得ることにつながっていれば幸いです。

卒業生の皆さんは、社会に出て働かれる方、大学院へ進学される方、起業される方、あるいはこれからの進路をじっくり考えられる方など、実に様々だと思います。その中では色々な苦労もあるでしょう。私も社会に出た後に数々の失敗を繰り返してきましたが、それと同時に多くの学びも得ました。そこから得られた私なりに大切に

感じてきたことを、いくつかお伝えします。以下はあくまで私自身の経験に基づくものです。中には

共感しにくいものもあるかもしれませんが、ぜひ皆さんりの考えを大切にしながらそれぞれに受け止めていただければと思います。

まず、少し背伸びをするくらいの仕事を引き受けてみる。そうした経験の積み重ねが、気づかぬうちに自分を成長させてくれます。次に、周りが見えなくなったときは、いったん立ち止まり、目の前のことに一つずつ取り組むこと。そうしているうちに、自分の考えや進むべき方向が見えてきます。そして、周囲をよく観察すること。人の動きや関係性が見えるようになると、行動の失敗はぐっと減ります。また、相手の立場に立って考えると同時に、自分の意見もためらわずに伝えること。そうする中で、信頼できる相手が見つかります。さらに、周りの評価を気にしすぎないこと。気にしすぎると、知らないうちに視野が狭くなってしまいます。そして何よりも、常に柔軟であること。変化の激しい社会の中で、これほど大切な姿勢だと感じています。

皆さんのこれからの歩みが、実り多いものとなることを心から願っています。